【ポスター発表】

機関誌『社会福祉学』における質的研究の現状と課題

○　札幌学院大学社会情報学部社会情報学科　　堀内　浩（7352）

キーワード：質的研究、機関誌、M-GTA

１．研 究 目 的

本論では，日本社会福祉学会の機関誌である『社会福祉学』に掲載された論文において，質的研究を使用したものを分析することを目的としている．これにより，社会福祉学における質的研究の受容のなされ方やいくつか種類が存在する方法論の使用傾向，また，当該方法論を使用している論文のテーマや研究目的といった諸特徴などを明示する．先行するものでは，レビューの方法や分析対象期間の決定理由が曖昧といった問題が示された．本論は約 20 年の掲載論文を分析対象期間としながら,今後の社会福祉学における質的研究の発展や方向性，そして課題などを導出していくことにその意義がある．

２．研究の視点および方法

本論が分析を行なっていくデータは，1992 年 6 月の 33-1 号から 2013 年 2 月の 53-4 号（2013 年 5 月現在において最新号）までの『社会福祉学』における質的研究の論文である．なお，本論の研究目的から分析対象となる論文の特徴を踏まえ，以下のようなカテゴリーから分類を行っていく．それは 1.テーマ（高齢者や障害者など），2.方法論（M-GTA やライフストーリー法など），3.データ収集方法（インタビューや参与観察など）の 3 つである．

３．倫理的配慮

本研究は，日本社会福祉学会の研究倫理指針を遵守して行われた．

４．研 究 結 果

本論の分析対象となる質的研究の論文は，74 篇であった（CiNii 使用，内容分析，テキストマイニング,ブール代数アプローチを除く,また Japanese journal of social services は分析対象としなかった）．また，論文数の推移を見ると，1999 年以降，一定の増減が見られるとはいえおおむね年度毎に 3 篇から 8 篇程度掲載されていた．さらに，使用されている質的研究の方法論には，M-GTA に代表されるコーディングの方法論を使用することにより，インタビューデータを概念化しながらストーリーを構築し分析していくものが約半数を占めていた．これに続いて，事例研究やフィールドワークによって作成されるエスノグラフィー的な論文も比較的多く見られた．加えて，質的研究の方法論を使用している研究対象やジャンルとしては,ソーシャルワーカー(援助者),障害者,高齢者が比較的多く，続いてボランティアや福祉教育などといったテーマが見られた．一方で，マクロ的研究が主流な分野，いわば社会福祉原論，福祉哲学，歴史などでは選好されていなかった．

５．考 察

本論では，質的研究がどのように社会福祉学において受容されているかなどを分析するため，複数の論文を検討することによってどういった研究が行われ蓄積されつつあるのかを明示してきた．そこでは，質的研究の論文掲載本数は以前よりも実際に増加してきており，M-GTA（などコーディング）を中心に多くの質的研究の方法論が利用されていた．また，選好されるテーマや研究目的も多様性があり，マクロ的な分野を除いた多くの分野で使用されている．その一方で，概説書や入門書において目にするような方法論でも，社会福祉学においてはほとんど使用されていないものも見られた．例えば，事例研究やライフヒストリー法は一定数見られ，アクションリサーチや KJ 法もいくつかの論文で利用されている．しかし，エスノメソドロジー，会話分析にいたっては全く使用されていないという事実がある．誤解を承知で極言するのであれば，社会福祉学における質的研究の現状とは，M-GTA を中心としたコーディングとそれ以外と見なしても良い方法論の使用状況だと言える．

こうした事実から，研究テーマや目的が何であれ，コーディングすれば収集データが容易にかつ短時間で説得的にまとめられるといった，安易な利用や理解も起こってくることが懸念される．また，M-GTA は半構造化面接によるインタビューにより収集されたデータを利用することに適しているとはいえ，面接状況における認識論や相互作用だけではなく，インタビューという方法論の困難や限界をもそのまま抱えるという事実に注意すべきである．こういった，M-GTA などコーディングの理論的背景や認識論を正確に理解せずに使用する危険性と一緒に，M-GTA を含めた質的な研究方法はその方法論自体を技法としてだけではなく，1 つの社会科学の理論として理解（教育）していく必要がある．そのため，学会などで共通の知識とされるような，質的研究の各方法論を使用した際における方法論の理論的前提や，認識論の差異が反映された基準，準拠点として参照可能な要項的な存在が必要であると考えられる．そうした要項は，学会発表や機関誌への論文投稿前/後における自身の質的研究の論文だけではなく，データに基づいた介入や計画，そして評価といったソーシャルワーク実践において共通の知識，前提とされている理論的背景，そして配慮すべき倫理的な指針をも確認することができるものである．結局，実践と研究の往復をより容易にする質的研究の技術やその教育方法の構築は，エビデンスの産出，産出された知見や理論の応用それぞれのより良い関係性，そして，専門教育や理論が専門的な臨床実践に役に立つという事実の基礎となるだろう．したがって，社会福祉学では今後も質的研究の議論をより活発に行うことにより，その発展を今以上に促していく必要があると言える．

こうした知見と考察を踏まえ，今後の課題として，M-GTA だけではなく質的研究の方法論を使用している論文では，方法論の手続き自体やその記述が適切に行われているのか，どういった手続きの部分が間違えやすいのか，どういった注意や修正が必要とされているのか，どういった表現が誤解を招くのか，どのような倫理的な配慮や研究態度が必要とされているのか，などといった検討が必要であると考えられる．